



蛸親爺

第8話 白枠に並ぶ

雅^{がうん}雲すくね

駅前ハンバーガー屋の窓ガラスに蛸がへばりついている。窓越しに客の若い男が坐っている。こちらは、盆に敷かれたチラシに目を注いだり、目をつむったりしている。

蛸が窓を叩きだした。若者の眼が蛸を見定めた。口では水を噛み砕いてゐる。

「おう、小川さん。小川さんじゃねえの。小川さん、小川さんてばよう」と奥に坐る青年に向かって窓を打つ。一本二本、八本まで打って、吸盤をガラスから剥す。また一本ずつ叩く。剥す音がガラスに響く。

客の男は蛸を見据えたまま立ち上がった。蛸を見据えながら、口には紙コップがある。右手に紙ナプキンをつかんでいる。

「小川さん。何だ、届いてないのか」と蛸は窓ガラスを離れて玄関に廻る。客の男は腰を下ろしてテーブルを拭きだした。

出入口の自動扉が開いて、蛸が泳ぐ様な恰好で入って来た。

店はカウンターから始まり、壁に沿ってビニールシートのソファート、盆に脚をつけた形のテーブルが並ぶ。

隅の席に青年が納まっている。空の包みを端に寄せ、『図説 暖炉』と題した本の頁を方々繰りながらストローを口に当てている。

「小川さん。小川さん」

「あ、どうもおじさん。こんにちは」

「どうもどうも。さっきから呼んでいたんだけどね。入って来ちゃったよ」

「何かありましたか」

「別に、用ってほどのものはないんだけど。見かけたから声をかけたんじ

やない。これから百万年あたりで猪口を傾げるかと思っていたところだから。ま、ここでいいや」

蛸は青年の向かいの椅子を引いてあぐらをかく様に坐った。

「百万年って何ですか」

「ああ、小川さんが通る頃は、寝てるか仕込みしてんのかな。あれだよ。鳩を鳥籠に入れて地面に置いてる肉屋あるでしょ。あの並びにある食堂だよ」

「あ、おじさんがよく行く」

「そうそう。通るでしょ」

「あの店は百万年って言うんですか」

「そうだよ。屋根にトタンの看板がのっかってあるでしょ。トタンが剥れかかっているけれど、『民衆食堂百万年』って。登記上は、増田商店で出しているらしいんだけどね。縁起がいいってんで看板だけ『百万年』って出しているんだよ」

店員が通りかかるのが蛸の目に映った。

「あ、ええとね。ビール。あと蒲鉾か、空揚げある」

「恐れ入ります。ご注文はカウンターでお願いします」

「え、そうなの」

「入口の方で、先に注文するんですよ」

「あ、そう。食券なんだ」

「いや、食券ではなくて」

「そうか。まあいいや。横着しちゃいけねえな」

カウンターに並ぶ店員に相對して、客が一人ずつ納まっている。蛸は手近な所に並んだ。

「恐れ入ります。こちらにお並び下さい」と入口脇に立つ店員から指し示された。

店員はカウンターに入る。蛸は白線で区切られ、矢印が敷かれた枠に残る。

「あ、こんな入口のまん前で待っていてもしょうがないわな。その辺ぶらぶらしてるから。番になったら呼んでくれ」と蛸は枠を出る。

「お待ちせしました。こちらへどうぞ」と今しがたの店員がカウンターに納まって、蛸を呼び寄せる。

「何だ、早いな」

蛸は滑る様にカウンターの下へ入り込んだが、上からは蛸の姿は窺えな

い。
「ええ、とね。熱燗。あと、空揚げか肉炒め」と見上げて、「ありゃ、どこだ。よいしょっ」

蛸が吸盤を使ってカウンターを這い上がろうとするのを、店員が押しとどめた。

「恐れ入ります。ご注文は下でお願いします」

「あ、わかる。熱燗ね」

「恐れ入ります。熱燗は扱いがありません」

「え、熱燗ないの。じゃあ、ウイスキー。二級ね」

「お飲み物はこちらからお選び下さい」と店員がメニューの下敷きを下ろして見せた。

「ええと、何だこりゃ。コーヒーはあるのか。コーヒーでいいや」

「サイズはいいがいたしますか」

「ちいとばかししか飲まねえからな。小さいのでいいよ。あとつまみは、と」

「ミルクと砂糖はおつけしますか」

「まだコーヒーが片づいてなかったのか。ええと。どうしよう。どっちでもいいんだけどな。ま、いいや。あと、空揚げある」

「チキンナゲットでよろしいですか」

「ナゲッタ。何それ。空揚げなの」

「鶏肉を揚げた物でございます」

「空揚げじゃないの。じゃあ、それ三つくらいちょうだい」

「三個入りでよろしいですか」

「うそよ」

「ソースはいかがいたしますか」

「ソース。ソースなんてかけなくていいよ。塩ふっといてよ」

「ソースはマスタードとケチャップがございます」

「ございますって、それしかねえのか。じゃ、ケチャップ。あと、なんだ。これも食おうかな。せっかくだからね。へへっ」とハンバーガーの写真を指す。

「ご注文を繰り返します。コーヒーの小がお一つ。チキンナゲットがお一つ。ハンバーガーがお一つ。以上でよろしいですか」

「ああいいよ」と蛸は席へ戻ろうとする。

「あ、お待ち下さい」

「え、まだ何かあるの」

「三百八十円になります」

「ああ、勘定ね」と蛸はカウンターの上に小銭を並べた。

「ちょうどお預かりいたします。そのままお待ち下さい」

「え、待つの」

意外というけしきを浮かべた蛸に、カウンターから出てきた店員が、コーヒーとハンバーガーの載った盆をしゃがんで渡した。

「チキンナゲットは只今お作りしておりますので、あとでお持ちします」

「何だ、まとめて持って来てくれて構わないのに」

蛸は「十」と番号の示された旗を戴いて席に戻った。

「いやいや、難しい店だね。『お待たせしました』って、出てくる分にはちっとも待ってないよ。注文の方がよっぽど手間がかかってね」

「やっぱり、ビールはありませんでしたか」

「ねえ。ビールもウイスキーも何もねえ店だな、ここは。何ではやってんのかね」

「チキンナゲットをお待ちの十番のお客様、お待たせしました」

「あ、どうも」と蛸は礼を言う。

「早いね。待っていたっていいのに」

「カウンターで待つと、次のお客様を捌きづらいからですよ」

「店の都合か」

「利便性のためですね。自動改札と同じですよ」

蛸はコーヒーを啜り、ハンバーガーを齧る。

「あ」

「どうしました」

「ピクルス入ってるよ」

「苦手なんですか」

「まあな。蛸になってからというものの、野菜の味がな。ピクルス食ったってなあ。栄養あるのかね。ピクルス」

「どうですかね。そういう物は、味のバランスを調えるための物でしょうから」

「小川さん食べないよね」

「え、ええ」

「仕方ねえ」

蛸はハンバーガーをむしゃむしゃと、たちまち平らげてしまうと、小川青年の盆に残った、レモン汁の入った小袋に目をとめた。

「それ何」

「レモンです。紅茶に入れるつもりで」

「レモンはあるのか。さっき貰ったときよかった」

「なら、これ使いませんか」

「いいの。じゃ、遠慮なく。さっきレモンあるなんて知らなかったからさ。ケチャップ貰ったんだけど、小川さん持って帰らない」

「僕はいいです」

「そう、じゃ、返して来るかな」

「たぶん、捨てると思いますよ」

「え、そうなの。それじゃ、持って帰ろう」

蛸は紙ナプキンを一枚取り出すと、ケチャップの袋を包んだ。空揚げをつまんで口に入れる。あたりを見る。

「どうもこういう店は尻が坐らねえな」

「椅子が硬いですからね」

「何だな。店の造りがな」とレモンをかけた。空揚げを口に入れる。

「坐って食ってても、食うことしか出来ねえ。新聞も置いてねえし、テレビもねえ。やっぱり、店の親爺相手に世間話の一つや二つしなきゃ。ちま

ちまとハンバーガーやらつまみやら一人、手づかみで食ったって、食っても食った気がしないのよ」

「食事もある程度文化的なものを含んでいますから。単に食べるだけ、作法もなしでは、精神的にはお腹が空いたままなのかもしれませんね」

「でしょ。外から丸見えだし」

「そうですね。かえって百万年みたいな店は、入口が曇りガラスで、店のなかが見えないから入りづらくて」

「おれにとっちゃ、この店の方がよほど敷居が高いわな。まず頼むまでがまどろっこしくていけねえ。あのメニューもな、ぱっと見たって、何を目当てに選べばいいのか。蕎麦屋の品書みたくさ、一行一行並んでいけば、頭から順に見て行って、『じゃあ、今日は鴨南蛮にしようか』って決まりがつくのにな」

「そういえば、お蕎麦屋さんで、もりの横に書いてある『大もり』って何の大盛りなんですか」

「ありゃ、もりの大盛りだよ。もりは筵に盛った物だから盛りだ。その大きいの」

「ああ、そうなんですか。お蕎麦屋さんのメニューであれだけがわからなくて」

「ハンバーガー屋のメニューは、どこが頭でどこが尻だか、書いてある物全部見切れねえけれどな。ありゃ、品書と言うより、チラシだよな。スーパーあたりの」

「あれは、メニュー全体が、一目でわかる様になってるんだと思います」

「そう。一目で見る様に出来てるんだ。おれはまた、さよろさよろしちゃうって、しまいに八方睨みになりそうだ」

「でも写真があって、わかりやすいでしょう」

「近頃は、何でもああいう、つるつるのシートで示されるよね。ここから選べって」と温いコーヒーの蓋を外してあおる。

「平面にして区切ってしまえば店もお客さんもそれ以上考えずに済みますからね。比較するだけで。わかりやすくはなっていると違います」

「写真指して、『これとこれ』で済むのはいいね。蕎麦屋なんかじゃ、机

に立ててある献立を持って『これ』って天ぶらそばを指したつもりが、『お
かめですか』と隣を言われちゃって。『ああ』と頷いとくけどね。頭の後
ろに『おすすめ 冷やしたぬき』とか出されてあれば、間違えないだけ
れど」

「メニューを言えばいいんじゃないですか」

「なんかね、食い気を悟られたくないっていうか。『パン』とか『スパゲ
ティ』とかって、言うの照れくさくない」

「いえ、別に」

「そう。世代の違いかね。なんかね、男の口から『パン』って出るのが面
はゆくてね。今でも。饅頭とか芋とか、あと、A定食B定食とか、符牒
で注文するのがいいね。蕎麦なんて、『もり』か『大もり』で済むし。昔
の牛井屋なんてのは、もっぱら牛井しかなかったから、『並』と言ったとき
ゃ、牛井が、『弁当の並』と言えば牛井弁当の並が出てきて、簡単だった」
「今でもそれで通じますよ」

「あ、そうなんだ。あと、『御馳走さん』は『御勘定』と同義だったし。『あ
れ』『これ』『いつもの』『任せる』で片がつくのが何と言っても入りやす
い店よ」

「なんだか、片言ですね」

「サラリーマンってえのは、普段から聞かれねえ限り、余計なことをしや
べらねえ癖みたいなものがついてんだな。逆に、客に一から十まで言わせ
ずに、どうしたことでこういう話を持ちかけて来たのかなって、会社を持
ち帰ってから考えるのよ。まあ、百万年なんて、黙ってりゃ勝手におすす
めを出してくるよ」

「今の人は皆、写真を見ることで、出てくる物を期待しながら自分で注文
したいんですよ」

「ああ、そうなんだ。おれが行きつけの店なんて、付け合わせが毎度変っ
たり、箸休めの胡麻豆腐が奴豆腐やつどふになったり、その奴やつどふの上が昨日は葱、今
日は生姜かと思えば、夕方には紫蘇の実になったり。百万年なんてよ、芋
田楽を頼んだら茄子田楽が出てくるし。『いや、ケチャップ切らしちゃっ
てさ』とかでオムライスにカレーがかかって出てきてさ。そんならソース

で構わなかったのになって、なかはチャーハンになってたな」

「僕も前に学食で薩摩揚げ定食を頼んだら、『薩摩揚げが切れちゃってね』とコロッケが出てきたことがあります」

「それじゃ、コロッケ定食じゃないの。メインが変わっちゃしょうがねえな。薩摩揚げが食べたくて頼んだのになあ」

「ええ、まあ。学食で食券を先に買ってしまいましたから、代金は薩摩揚げ定食のままで」

「学食の親爺も、学生相手だと思って適当にしていやがるな」

「普通、『品切れ』の札が出るんですけれど、その日は出てなくて、食べたあとに見たら出ていました。別に、何でもよかったので」

「さっきもさ、向こうで、『空揚げ三つぐらい』って一応言ったけれども、二つでも三つでも構わないわけだし、『ソースは何にしますか。ミルクはつけますか』とか、そんなにしきりに尋ねられてもな。何だかっていいのよ。そんなに、細かなところまで考えて食わねえって。そのために日替わり定食ってのがあるんだからね」

「メニューを決めて店に来る方が珍しいですな」

「でしょ。コーヒーだって、砂糖入れるか入れないかなんて、飲む間際にならなきゃわかりやしないんだから。ここに置いときゃ済む話よ」と足の一本でテーブルを小突く。

「この頃のお店は気楽な反面、お客さんの行動も似通ったものになる様に作られてはいますね」

「角砂糖をコーヒーカーップに落とし込むのがいいのに。一片の角砂糖を小匙にのせてね。しゅわわわわって、細かな泡がひろがって。味わいのうちでしょ。そういうのも。だいたい、店に入ってからがよくわからねえ。どこにどう行きゃいいんだか。あっちか、と思えばこっちで。そっちなかと思えば、『こちらからどうぞ』って、『どうぞ』も何も無いよ。ああ、おいらにゃどうにも及びません」と八本の足をくねらせた。

「すぐに出てきますけどね」

「すぐに出てきすぎたよ。少しは間をくれなきゃ。腰をかけたら一服して、その次でしょ。食うのは。皿が出されるまでに、ひとまず話したいこ

ともあるよね」と蛸は青年の相槌を待つ。青年の口にはストローが収まっている。蛸は続けた。

「それに百万年だって、『急いでくれ』って注文すればすぐ出てくるよ。おでんなんて、一年中煮っ放しだし。ビールなんて、自分で冷蔵庫から出したら早いからね」

「焼きそばなんて少しはわかるでしょう」

「あの親爺な。今度、『焼きそば超特急』って试试看な。一分で出てくるから」

「火は通ってるんですか」

「コークス使えんだよ」

「コークスですか」

「ああ、バーナーでコークスに火をつけるでしょ。その上に鍋載せたらすぐに熱くなるから。そこに、キャベツからそばから皆放り込んで、一混ぜしたら出来上がりよ。それ以上やると鍋が熔けちゃうからね」

「危なくないんですか」

「まあ、コークスは煙が出ないからな。換気してりゃ平気だ」

「目が沁みなくていいですね」

「ああいう店も、小川さんが小さい頃まで、小川さんちの路地口にもあったんだけどなあ」

「なんとなく覚えてます」

「うん。角っこに爺さんが酒饅頭の蒸し台据えてな。道端で商ってた。あそこは爺さんはいいんだが、親爺がいい加減だったな。今日は休みかと思つて、宵っ張りにガラス戸の上から覗き込んだら一人、親爺が一升瓶片手に。その代わり、ひいきの相撲が勝ったら気韻が好いとかで、ビールが出てきたな」

「それはおごりなんですか」

「どうだかな。いちいち飲み食いしたもん、こっちも勘定してないからな。親爺だつて確かに覚えちゃいないって。しかし、この頃の店は客を動かしてばかりで、メニューにねえ物も頼めねえし。ビールがねえなら、一走り買ってきてくれりゃいいのに。百万年なんて、何だつてあるぜ。煙草

だつて備えてある」

「煙草も売ってるんですか」

「いや、売ってんじゃないくて、置いてあるんだよ。客の煙草が切れるでしょ。そんな時、いちいち買いに出ていらんないから、親爺が予め、煙草屋から買って置くのよ。それを、そのままの価だけ貰って渡すって仕組みだな」

「そういう店もあるんですか」

「そういう店ばかりだったな、昔は。ええと、食ったよね。そろそろ行くか」

「あ、六時に待ち合わせているので」

「え、そうなの。まだ帰らないんだ」

「おじさんは、寄る所はないんですか」

「そうだな。帰って壺の掃除でもするかな。まあいいや。それじゃ。あ、こりゃどうするのかね」と包み紙が丸くうづくまる盆を指す。

「自分で下げるんですよ」

「そうだと思った。よっと」

蛸は盆を持って、カウンターへ行き、「ごつそさん」とカウンターへ上げた。

胸からクリーム色のリボンを垂らした高校生が二人、入って来て、一人がそのままカウンターに向かおうとしたのを、連れの一人が制す。

「まだまだ。この線で待つんだよ」

「たーこたーこ。たーこたーこ」と蛸は頷きながら店を出た。黄昏の雑踏に足取り軽く。

ハンバーガー屋の向かいでは、駅前の応用美術陳列館に登る階段を、婦人が斑猫に赤い紐をつけて犬のごとくに散歩させている。猫は紅葉もみじの散り敷かれた階段でしゃがんで動かない。頭を下に向けて、逆さになって寝べった。婦人は紐を一つ引く。猫の頸が伸びた。婦人は階段を降り、猫を下から手を振ってあおる。猫は駆け下りた。

〈つづく〉